

記 念

藤原喜一 明治 43-昭和 55

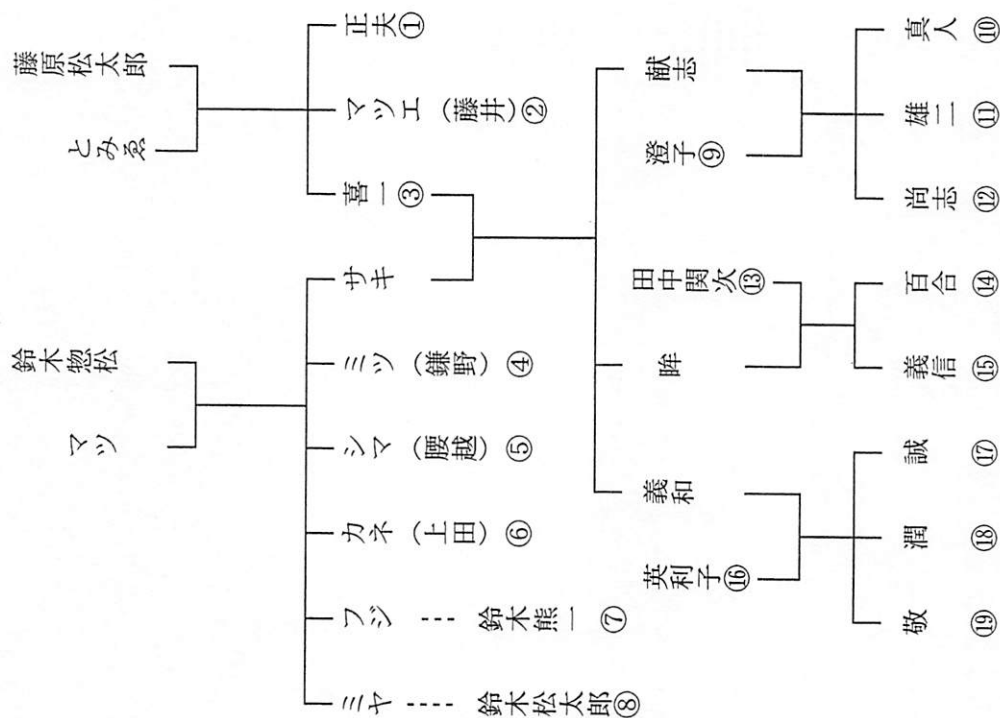
藤原サキ 大正 3 -平成 12

In Memory of

Fujiwara Kiichi 1910-1980

Fujiwara Saki 1914-2000

In Christ



平成十三年十月現在

- ① 京都府綾部市本町一丁目三十五番 藤原直枝
- ② 大阪市淀川区長柄中二丁目六番三十一号 藤井一雄
- ③ 兵庫県氷上郡柏原町柏原三百十番地
- ④ 兵庫県氷上郡柏原町屋敷四百三十八番一号 中村良子
- ⑤ 埼玉県さいたま市南浦和二丁目十九番十二号
- ⑥ 岐阜県大垣市室村町二一八三
- ⑦ 新潟県南魚沼郡塩沢町大字関
- ⑧ 新潟県南魚沼郡塩沢町大字関
- ⑨ 東京都東村山市青葉町二丁目三十五番地青葉町住宅十一一三〇二
八尾精一・ふさの長女
- ⑩ 昭和三十五年五月二日生 ⑪ 昭和三十二年十二月二十七日生 ⑫ 昭和三十六年十月十九日生
- ⑬ 兵庫県氷上郡氷上町氷上三百九十四番地
田中謙藏・まさゑ三男
- ⑭ 昭和三十五年九月二日生 ⑮ 昭和三十八年七月二十七日生
- ⑯ 京都市上京区五辻通 大宮東入 東石屋町 七五五一八
上原茂胤・伸子三女
- ⑰ 昭和三十二年一月十九日生 ⑱ 昭和三十二年一月十九日生 ⑲ 平成三年三月十七日生

藤原家の家系図

本籍 兵庫県多可郡杉原谷村 (現加美町) 大袋一一九

宗派 禅宗京都花園妙心寺派

意得常林禅定門 明暦二年申九月十五日 (西暦一六五六年) 没

菊亭妙秀禅定尼 寛文十二年九月十五日 (一六七三年) 没

藤原家中興祖也

| | | | |
|---------|--------------|---------|---------|
| 一管情陽信士 | 天保四年十一月十五日 | (一八三三年) | |
| 唯有智法信女 | 文化十三年十月十五日 | (一八一四年) | |
| 宗榮禅定門 | 天保八年十一月十五日 | (一八三七年) | |
| 鉢雪禅定尼 | 天和二年五月二十四日 | (一六八二年) | |
| 宗休禅定門 | 弘化五年二月二十四日 | (一八四七年) | |
| 授翁道興信士 | 弘化五年十月二十日 | (一八四七年) | |
| 禅止妙難信女 | 文政十年二月八日 | (一八二七年) | |
| 明暗知燈信士 | 安政六寅九月二十九日 | (一七九四年) | |
| 安梅妙養信女 | 寛政十三年正月二十四日 | (一八〇二年) | |
| 授岳道興信士 | 明和二年一月二十四日 | (一八六九年) | |
| 夏屋妙涼信女 | 嘉永七年六月二十四日 | (一八六〇年) | |
| 不味宗徹庵主 | 明治三十五年八月二十三日 | (一九〇二年) | 俗名 興三兵衛 |
| 善應妙緑禅定尼 | 明治三十八年十一月七日 | (一九〇八年) | |
| 常屋良観信士 | 明治四十四年六月十七日 | (一九一一年) | 俗名 松太郎 |
| 藤原とみゑ | 昭和四十六年十一月十四日 | (一九七一年) | とみえ |
| 藤原こう | 昭和十七年二月十六日 | (一九四二年) | |
| 藤原喜一 | 昭和五十五年六月六日 | (一九八〇年) | |

以上は、昭和五十年頃、喜一が調べたものを献志が書き写したものである。
昭和三十七年、喜一は墓石を、大袋から兵庫県水上郡柏原町岡端に移した。

鈴木庄左工門過去帖調 (二九五年 昭和六年) 調

| | | |
|---------|------------------------|-------|
| 高山石齋節信士 | 享保四改九月二十九日 歿 庄左工門也 | 270 前 |
| 天岸淨地信女 | 延享三丑五月四日 歿 庄右工門 母 | 241 |
| 志際倡悃信女 | 延享三丑至十二月十九日 歿 庄右工門 | 241 |
| 香界惠苗信女 | 寬政三六九月六日 歿 庄左工門 母 | 196 |
| 南岳貞薰信女 | 寬政十年四月十一日 歿 忠右工門 妻 | 196 |
| 常法明喜信士 | 寬政十二申三月三十一日 歿 忠右工門 | 196 |
| 真源淨真信士 | 文化七年九月十八日 歿 庄左工門 | 181 |
| 真岳妙成信女 | 文政五年十月二十六日 歿 庄左工門 妻 | 167 |
| 因室了縁禪是屋 | 文政七甲十月四日 歿 庄左工門 | 167 |
| 廣説童女 | 文政十一子正月二十四日 歿 庄左工門 | 167 |
| 淨山石惠住信士 | 嘉永七寅年十月九日 歿 | 137 |
| 實如童女 | 嘉永七年 二六日 歿 久之助子 | 137 |
| 得固妙了居士 | 明治三年正月十三日 歿 | 114 |
| 鉢真養禪童女 | 明治三十年九月十二日 歿 | 87 |
| 松室妙貞大姉 | 明治四十五年五月十九日 歿 庄五郎 妻 | 72 |
| 見山了性具是屋 | 大正十三年四月七日 歿 庄五郎 | 62 |
| 玉光妙照大姉 | 昭和三十年十二月十三日 歿 72 三才 | 40 |
| 蘭室妙清大姉 | 昭和三十一年五月三十日 歿 物松 妻 | 39 |
| 徳光道義居士 | 昭和三十六年二月七日 栄三郎 五才 | 34 |
| 寒山宗松居士 | 昭和三十九年一月三日 物松 八才 | 31 |



教会で求道中の喜一（右端）、左端は谷川良夫氏



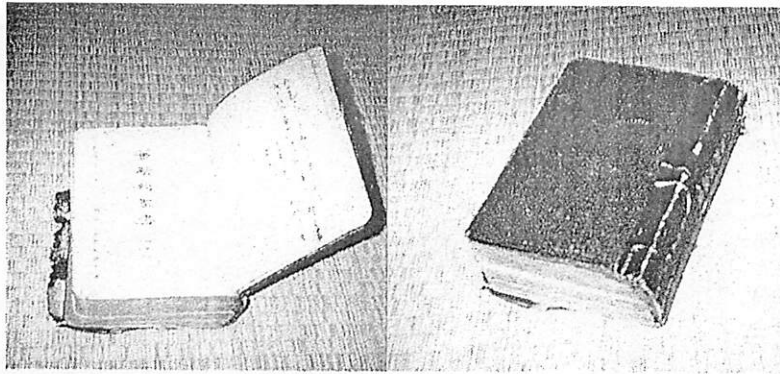
飯田牧師と共に喜一（18歳頃）



喜一 昭和10年頃
喜一の聖書 (S5年出版)



先妻 こう（旧姓山田孝子）
実兄 山田周二氏





藤原とみえを中心として藤原一族（杉原谷村大袋の実家）

後列左から、とみえの姉（竜野）と主人、吾一（松枝.夫）、一春、吉野（一春.妻）、正夫
 前列左から、一雄、松枝（長女）、こう（喜一.妻）、とみえ、梅野（正夫.妻）



藤原とみえ（S17年）



長男.正夫（S17年）



次男.喜一（S17年）



鈴木サキの実家（新潟県南魚沼郡石打村）における教会学校



右側：サキ 左側：友達



サキ



樋口家（東京）の子供とサキ



樋口家（東京）の子供達とサキ（右端） 昭和10年頃



後列左：サキ
後列右：ヤマ子
前列： 母マツ



シマ



後列左：フジ
後列右：カネの主人
前列左：カネ
前列右：ミツ



山脇末鍋（柏原女学校長奥様）ご家族とサキ



サキ 昭和 17 年頃



喜一、サキ結婚式 昭和 17 年 6 月 20 日 丹波柏原教会にて





昭和 18 年 12 月 撮影 (献志 昭和 18 年 7 月 17 日 誕生)



陣 昭和 21 年 12 月 23 日 誕生



義和 昭和 24 年 10 月 4 日 誕生





昭和 28 年頃 やぎおじさんニコルソン師来柏（崇広小）

柏原町屋敷の自宅庭



喜一



とみえ（綾部にて）



昭和 29 年 1 月 サキ父、鈴木惣松葬儀（新潟、石打の実家）
二列目右端：サキ、義和 後列右端二人目：喜一
後列中央：ミツ



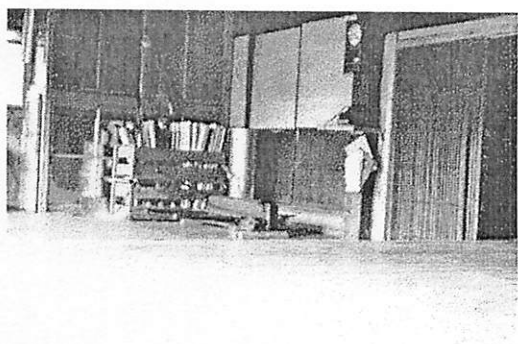
鎌野良作牧師、ミツ一家（柏原、自宅前）



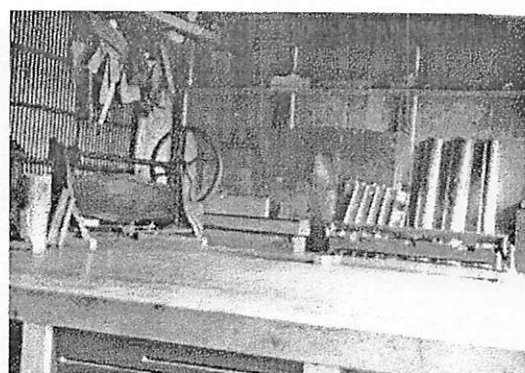
昭和 30 年 5 月 柏原警察署隣（下町）に自宅を得る



昭和 30 年頃 藤原ブリキ店



仕事場左側



仕事場右側

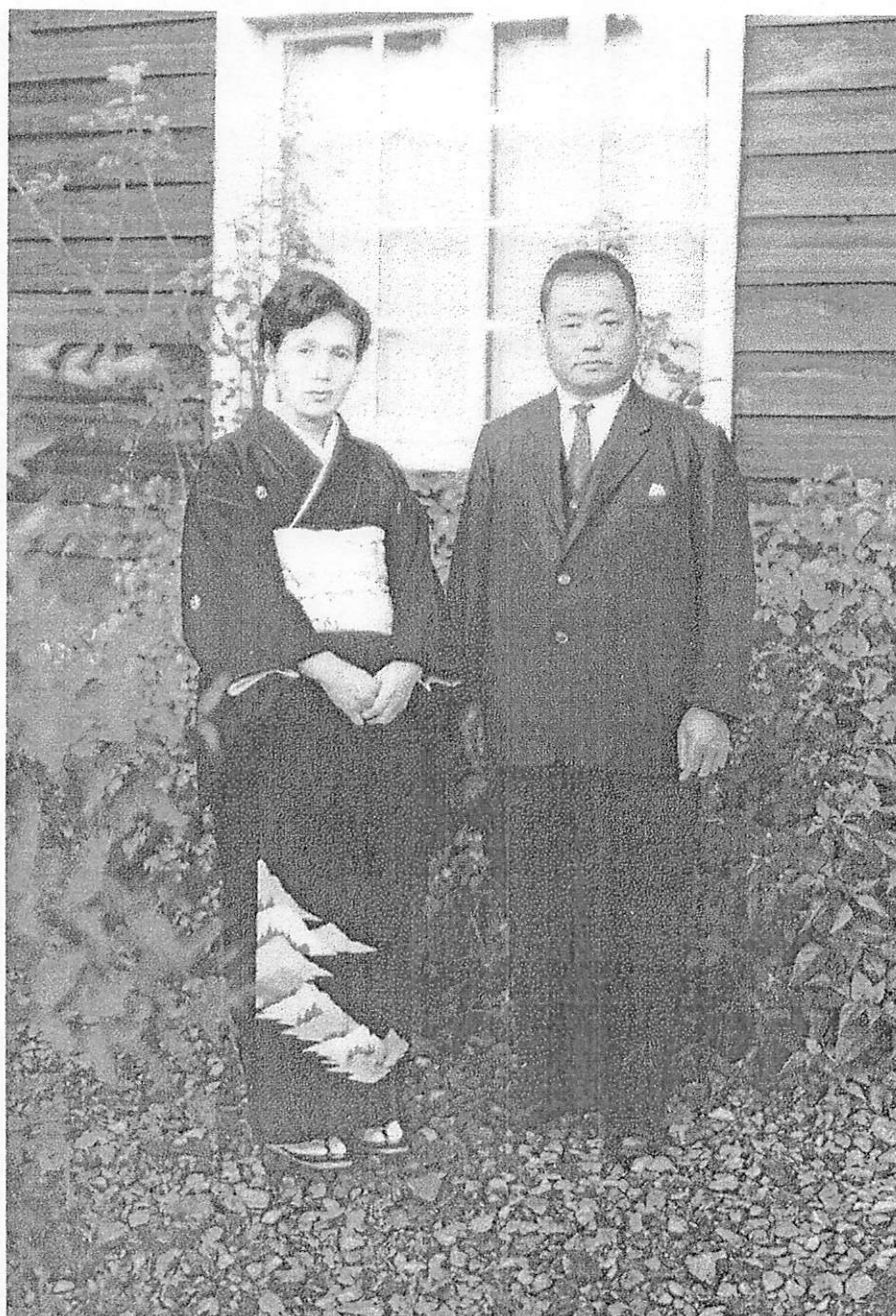
藤原 鉦力 店



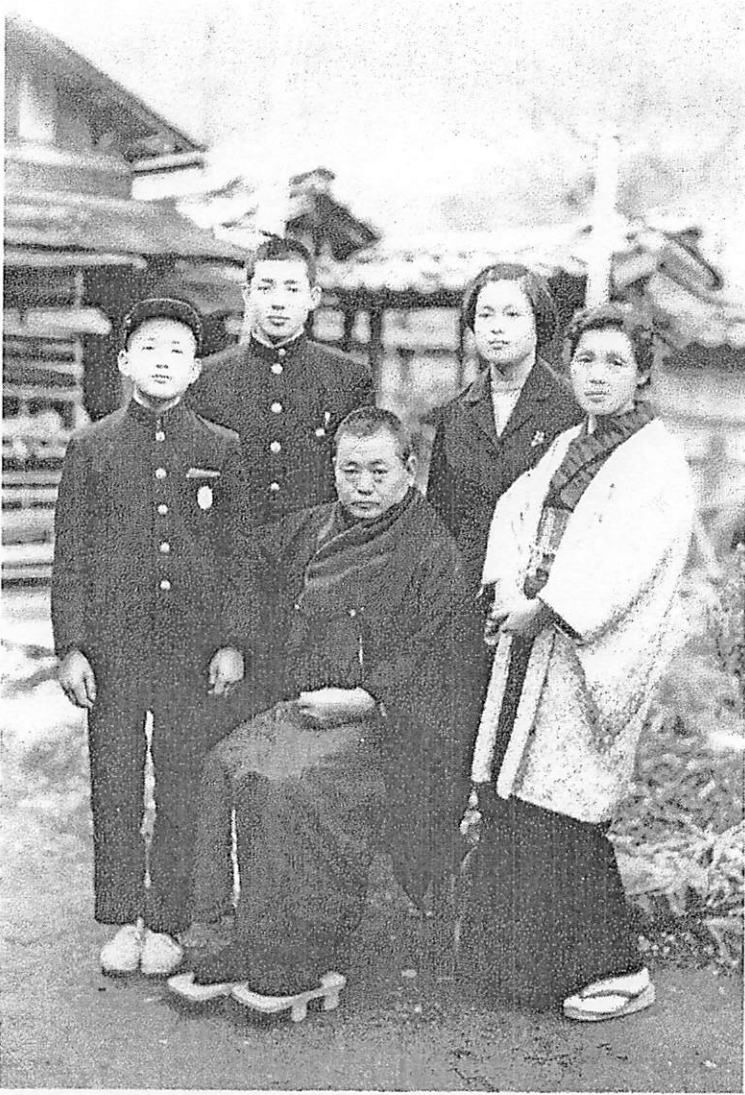
昭和 33 年頃 喜一姉藤井マツエの孫と共に



飯田牧師の葬儀



昭和 35 年 11 月 27 日 丹波柏原教会牧師館前にて記念写真



昭和 38 年 1 月自宅裏庭にて（前年秋、交通事故で喜一右上下肢骨折負傷）





昭和 39-41 年頃 正夫、喜一の家族と共にとみえ
綾部、大本まえ



曾孫を抱くとみえ（綾部）



不自由な右手で仕事をする喜一



綾部、大本教拝殿前にて



昭和 54 年 1 月 藤原家記念写真 (喜一最後の正月)



昭和 57 年鈴木家の姉妹 (左からサキ、シマ、カネ、ミツ)



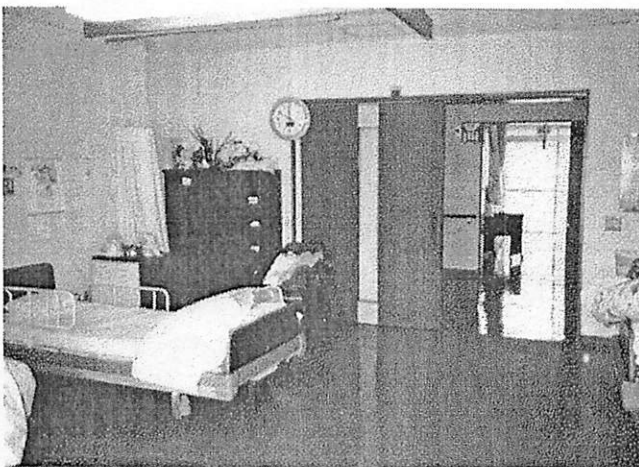
昭和 62 年 1 月 17 日



平成5年1月1日 崇広小学校にて



平成5年8月21日 喜一十三回忌 氷上町保養施設にて



平成6年10月から12年4月 サキは特別養護老人ホーム山路園でお世話になった

柏原町岡端（下町）にある藤原家の墓地



藤原 喜一
昭和十五年六月六日七十一才召天
藤原 廿 幸
平成十二年四月十二日八十五才召天

父母の言葉

ここには父と母の書いた二つの文章をあわせてまとめた。

一、これは父が存命中の昭和四十七年春に兵庫県立柏原病院に入院中、同じ病室で知りあつた方（山南町、藤井照夫様）よりアネモネの絵をいただき、父が自分の退院にあたり、その裏面に自分の気持ちを書きたためたものである。さらにもう一つは、鳥の絵を書いていただき自分の常日頃の思いを書いたものである。これらの絵は退院後も、額に入れて自室に飾っていた。なお、昭和四十七年は長男献志が二十九才で初めて就職した年である。

二、これは父の故人となつた直後、昭和五十五年夏に母が自分の気持ちを整理するために記したものである。したがつて、文章的には欠陥が多く、読みにくいので、部分的に編者が○印で修正したが、そのまま書き記した。

三、これは父の母教会である丹波柏原教会が召天者教会員の記録簿を作成するために求められたので、

昭和六十年五月に献志が書いて提出したものである。あわせてここにまとめた。なお記載の出生地は、その後の調べで、番地が誤つており、正しくは「大袋三七五番地」である。



蓮花
畫

馬太傳第六章二十五節

何をたふようか 何を致さるかと思わすうふなる

何をたふようか 何を致さるかと思わすうふなる

春足る時、有るまに今日まで我が家庭に在るを数々の重んも

かかざる時、そつつきることかな

私しの西航空機に於ける最時中に於て左の事。一ツ一ツ

家内の病室のこと、海水浴に行つた折、献志のこと、義和の自動車

事故のこと、私しの交通事故被災の時、二と。カ供養の教育のこと

住いのこと、左の事、まことにアブラハムか信仰によつて、カルテヤの

光を之出た程に私共の生活も放浪ものもの、有る左が、私共と

とそに歩み下さう左、今入院して居る事も、是れ悪んかう守られ

今がある。まことに神は試練をゆるさるるもの、のかるべき道をなす下さ

る聖言は、眞の實である

このアネモネの図は病中、グッドの横を置いた鉢の花に有る私の召される

時まで、念事、病法ととりくまねばならぬ、私がいまめとして

見よ、左めに書つて頂か。 喜々 一 昭和四十七年四月、足利の日



洋画
家

この小鳥の凶は相原社病没の六寒十九号の同室に
瘡食されていた藤井氏のお願で私の家庭に
なやまして頂いたものと有る

昨芝もすいに帰るって百金もこの九月に成れぬ溝二才に成る

献志さん三月一就職した美和さん大い四年をすませ下

太学後には進む。ヤがてこの鳥の少供も羽は左へ行くと

しかし私共の切なる願はちさの羽は左きりもよその歩が

今日迄もいな今後もか多り見て下さる

神の御力をあうはす事々人類の進歩はかして

役立ってくれる事を唯ひたすこと願ふ

喜喜

昭和四十七年四月 退院の日

昭和五十五年七月下旬にサキが記したもの

(昭和五十四年)八月十日 礼拝途中気分が悪いようでしたので、降りてくるように言ったのですが、言うことを聞きませんので、後(ほど)佐中の主人に自動車で送ってもらい家で横になっていたのですが、その日は三時頃の汽車で兄ちゃん(の)家族が帰ってくるようになっていたのですが、それもまたず、十二時頃柏原荘(病院)に行き、日曜日でしたので、なかなかとりついでくださいませんので、芦田先生のお名前を借りて申しましたら、早速診察して下さり、すぐ入院ということでした。診察の結果、血が半分以下ほど足りないとのこと、すぐ一日二本ずつ、二、三日(輸血を)続け、大分元気もでてきた様でしたが、一週間ほどした時に特別な注射をして下さったようですが、それがさわつたのか、再び口から血を入れたもの(血液の入ったもの)をたくさんみんなもどしてひどく弱り、ふたたび血を入れることを二本づつ二、三回づつ、元気をとりもどしたのですが、食欲もでて病院のおかずだけではものたりないほどに(なり)家から差し入れをしたりしておきなっていました。なお診察の結果、息子嫁、(娘の)陣ら呼んで検査の結果を申されたとの事(でしたが)その時こそ本当にしつく(シヨック)でした。一人で心につんでおくことができず、綾部の兄貴(様)に家まで来ていただき、自分の心一杯話したことを身に覚えています。あれほどしつく(シヨック)のことはなかった。でも主人を少しでもぐあいよくしてあげたい気持ちが一杯でしたので、五十五年六月の死の後というもの(は)もの言(う)事もできず、どうしてよいやらなんとも言えない気持ちです。子供達もいろいろと心をつかつてくださるのですが、どうにもならず、信仰さい(え)もなく、なんとみじめな事かと、自分ながら愛想がつきる様です。主人や子供を失った方の、頭がぼうけて見るかげもない様になつ

てはならないと自分に言い聞かせてがんばっているものの…………(七月二十三日)

今日も大きな雨が降り、水が大きく(多く)なることに見出す事ですが、前の川の水がすぐ庭の縁の下から水が入り、庭一杯になることがたびたびでしたので、自分(主人)が死んでからもこんなことになつてはというので、昨年五十四年新年早々より役場へ行き町長さん(谷口務様)に無理にもお願いして五十四年九月(柏原町長)選挙きわきわでしたが、約束を果たして下さり(いただき、当時)入院をしておつたのでいちにち外出させていだいて、自分の目で見ないと承知できないというかんじです。

昭和五十四年六月二十七日、サキ同窓会を思い出す。六月二十四日より越後に行き、二十七日より出発する同窓会の旅行は最後の時であつたと、自分は佐渡に行つて見たかつたらしい(が)一人ではいやだこの事だつたので、一緒にお付き合いした事はよかつたと思つた。

昭和三十七年九月二十日、杉原に仕事にかよう途中、ポインター(二百五十CC大型)に乗つてんおたのですが、材木を積んだ三輪小型自動車(と)衝突、大名草(オナザ)青垣との川裾で衝突(の)為)右手、右足(を)ひどく骨折(し)、その為)に二年何ヶ月かの養生での石膏は何べんか柏原荘(病院)でしなおしたかわかりませんが、ついに手の腕は継げず、右手が不住になり、左手ばかりで仕事をしておりました。昭和四十年頃からそれも足りないサキの相棒では言うことのできない無理があつたこと(で)し(よ)う。大きい仕事の時には、松井さんに手伝ってもらつて、どんな大きい仕事でもひ(く)いきでうけあつてりつぱにしあげまし

た。その頃はまた、献志静岡大、陣柏原高校、義和柏中(学校)。仕事をやすむという事もできず、生活に事欠くという状態でしたので、若かつた(から)でもあつた事ですが、其後一回休んでもとにかく様にあつかましく仕事をしたものです。しばしば足場から落ちたりこけたり、昭和五十三年にはひどい肺炎になり、二ヶ月ほど入院していたかと思う。

腰を骨折した後、肝臓が悪かつた時、昭和四十七年四月退院の日と書いてあつた。その時より大体、体は弱つていた様である。

昭和五十五年(五十四年の誤り)八月十日病名の結果。

柏原荘入院後二ヶ月ほどで十月なかば頃に家に帰つてきて体に気をくばりながら食べ物に気をつけながら、それでもなかなか気がうらやまであつた事かと思ひます。仕事のしかけが気になるので、早くそれをかたづけたいばかり十二月末までにどうやらみんなに手づだつてもらつてどうやらかたづけほつとして正月を迎えて、寒くなりますので、ゆつくり三月頃までは休み、少しでも暖かくなつたらと思つていたのですが、二、三月くらいからだんだん体力がなくなつてくる様に見つけ、後の村上(南田多)の胸の仕事は、無理からにも小森さんにたのんでしていただく様にしたのですが、それまでにも、たびたび足がもつれて、そばに居る一人までがけ、便所でこけたり(しました。)義和さんがカナダに行く為、四月七日頃から、柏原へ帰つてきたのですが、四月十四日カナダにたち、その前の日より、寝間からテレビの部屋まで歩くことはやめてふとんに入る様にしましたが、体に力がなく弱る一方(で)、おふとんから起きるといふ事もおつらになり、背中がかゆいかゆい、おふとんが重たい、背中がだるい、手足をなげて体のおきばがないほどになりまし

た。)背中になにもでておらないのですが、朝に昼に夜にといづくあいに長いこと手ぬぐいでこすり、テレビを見る事さい(い)もつるさい様でした。鏡で自分の顔をうつしてくれと求めたので、チェーリップの時期には、ぼたん、アネモネ、イチハツ、ツツジ、アザリヤ(を)鏡に写し、天国に行つたらたくさんの花があつて、きれいなところだつて(と話して)「戦い終えなば武具をすてて天つふるさとの家に帰らん」と何べんか歌つてあげたことやら。

食欲もなく何かおいしいものとも思つたのですが、何を口にもつていっても、やつぱりだめだ。ハツタイでも食べてみようか、アイスクリームはあまいとか、おかゆうめぼしはいやだとか、牛乳はいやだとか、牛乳はいやだとか、野菜やらをたべないよつになつてから二ヶ月ほど(は)、まだソーメン(小さい束の)も少々やら、卵の半熟、キウリ、ツケモノが一番長く続いた様だ。おしまいの二週間ほどは食欲があるわけでもないけれど、青ものしぼり水、おもよとかくだものしぼり水、スイカ、牛乳、ヤクルトの小さいビン一杯がやつと(であつた。)よくむりをしてでも、口に飲んだものだと強まるかしらと思つていとおしく胸一杯になる。

(六月六日の)夕方六時頃もう飲めないといふことは何べんか。口から吐く息だけ、口をしめしてくれ、最後の言葉。夜十時「チャ」 二時三十五分 オシマイ

おれはもうあかんさかい覚悟しているから(と)何べんか(言つた。)そんなことはないわね。やつと子が手(を)はなれたところやのに、そんなこといつたらと励ましたものの、寂しかつた。かげで寂しく泣いた。でも神様の恵みの数々、ここまでささしていただいたのに、感謝し、義和がまあまあカナダまで行つてくれたこと、淋しい事ではあるが、いつまで自分のそばに居てくれるのでもなく、自分の仕事ができなくなつたこと

が、どんなにか淋しかったか、なまけない、なまけないと泣いた。それには何のことばもなく、しら(しよつ)がないわなあといったむき基に泣き、涙をぬぐってあげ、それでも私に(が)そばに居てお世話していただくことが(もちろことが)一番よかつたらしい。

おしこの(量)しるしを見ると(昭和五十五年)五月十日頃より、オシッコが出にくくなっていた様です。なおひどく二十一日―二十五日―二十七日。

鎌野のおかあさんが一週間ほど前、お祈(り)にきてくださった後、私が三年ほど前、綾部で入院していた時に、なんぼかかなしんだらしい 大きな涙をながしていたとの事。その時のことを話して、よかつたな―それは教会の方々 香川さんもひどく言っておられた。お母ちゃんが元気になつておしちゃんの患(看)病ができて(よかつたなあ)と言ったら、そのときはもう、ものを言わなくなつたときだったので、うんと大きくうなずき、私もそばにおつて、ものすごく感謝しました事ですが、数々の患、うたぐるわけではありませんが、なにもかもわからない気持。そんなことは神様にすまない事と祈りながらも、ついにしずんでしまいます。でも私が残つてよかつた。もし主人が後になつたのだらたら、こんな思(い)を、またこれ以上に困り、子供達も困つた事だ(らう)と慰められます。

常に喜べ、絶えず祈れ、すべての事に感謝しなさい。(テサロニヤ人への第一の手紙五章十六節)ハレルヤ

*文中の()内は、献志の書きこみである。

父のこと

藤原 献志

一、はじめに

父が天に召されてから五年半過ぎてしまいました。その間いろいろ思い出すことができましたが、もう話すことができないうとよけいに多くのことが思い出されます。また生まれてから最も世話になった人でありながら職に就くのが遅れたために、どれほどの親孝行ができたであろうかとの悔いが残ります。

人の記憶は齢とともに薄れてゆきます。そこでここに父のことを記して記念のよすがにしたいとおもいペンを執りました。ここに記したことは、あくまで小生のみた父であり、また思い違いがあるかもしれませんがそれは後日の機会に訂正したいと思います。

二、小生の思いだせる最も若い父

父の存在がはっきりと思いだせるのは、やはり小生が五、六才になってからと思います

その頃我が家は兵庫県氷上郡柏原町の屋敷という所に古い大きな家を借りて住んでいたが、父はその敷地の片隅、大きな土蔵の裏に一軒の家を建てた。周囲は古い郡公会堂のくずれかけた土壁と学校の寄宿舎を思わせる教会の建物の板塀に囲まれたごく狭い土地で

あったが、これが 木造中二階建の父の仕事場であった。家といっても屋根は檜の皮葺きで窓はガラスのかわりに目の細かい金網が張ってあった。壁は板張りだけであるから冬はすきま風がとて寒かったようにおもった。今からおもえば粗末な建物であったが、昭和二十三年頃は日本全体に物資の乏しい時代であったから父母は相当苦勞したのではないかと思う。その仕事場で父は米の大きな貯蔵器をよく作っていたが、その頃から父は仕事一途の生活であった。その時父は三十六才位であったが、私達一家がなぜその時そこにいたかについては、とりもなおさずそれまでの父の人生を語ることになる。

三、父の幼少期

父は明治四十三年一月十一日、兵庫県多可郡杉原谷村（現、加美町）大袋三七五番地にて藤原松太郎、とみゑの三人目の次男として誕生した。長男は綾部の伯父さん（正夫）で姉は大坂の伯母さん（藤井松枝）である。杉原谷というところは加古川の上流である杉原谷川の源にある山間の村であって、今は交通の便が格段に良くなっているが、当時はいずれの山村と同じく何の仕事もないところだと父は話していた。父松太郎さんのことについて詳しくは聞いていないが石垣などを積む仕事をしており、村の神社の近くにある堤は松太郎さんの手懸けた仕事とのことで、小生も連れられてそれを見せてもらった。綾部の伯父さんも子供の頃よく仕事場へ弁当を持っていったものだと話しておられた。父が次男であるのになぜ「喜一」という名をつけられたかについて聞いたことはないが、小生の

推察するには、一月十一日の誕生日は一月一日の丁度十日遅れということでもめでたいとの意味でないかと思う。ところがこの一家五人の家族は三年後の大正二年六月十六日に大黒柱の父松太郎さんの死に遭遇し、以来一家にとって苦難の道がはじまる。

なお父の誕生した年は西暦千九百十年でちょうどハレー彗星が地球に大接近した年であり、当時はこの星についての研究が充分にすすんでいなかったため、日本の世情に流言、噂、不安が流布したと新聞にはしるされている。この星は七十六年に一度地球に大接近することがわかっており、くしくも今年はその年にあたるが、今日ではそれを不吉な星と考える人は少ない。

その後の一家の生活は、生後まもない乳飲み子をかかえた母子家庭の生活であり、明治末期の山村における生活がどんなものであったかは想像にあまりある。大正五年杉原谷村尋常小学校に入った父は、かなりの臆ぼく坊主であつたらしいが勉強もできないほうではなかったと本人が言っていた。父は自分の通信簿を大切に保存していたが（今もある）、もし勉強などに関心がなければそんなものを一生持っているなどということは考えられないのではないかと思う。同十一年三月尋常小学校を卒業すると、当時の子供が多くそうであつたように母親のもとを離れ弟子奉公にでた。それが以後一生の仕事とするブリキ職人（板金職）であり、永上郡成松の田中元一という親方のところであつた。成松は杉原谷と佐治川沿いにある町で、佐治川と杉原谷川は下流の西脇で加古川に合流する。当時成松は佐治川による木材の輸送などで栄えていた町であつた。

四、父の自立

当時の弟子奉公は通常五年であつたので、父も昭和二年に年期明けになった。これにより父は職人としての歩みをはじめたわけである。この時十七才であつた。そして翌年の昭和三年二月八日に、かねてより通つていた成松にあるキリスト教の伝道所において洗礼をうけクリスチャンになった。この時一緒に受洗したのは谷川良夫兄（現、日本フリーストンジスト教団東住吉教会員）宮野文子姉（現、丹波柏原教会員）の他数名あつたそうであるが、そのなかで特に谷川兄とは特に深い関係のできる人であり、このキリスト教との出会いが父の人生に大きな影響をおよぼしているため以下このことについて述べる。

丹波地方にキリスト教の伝道がなされたのは明治の比較的早い時期からのようであつたが大正年間にはアメリカの宣教師ソントン師が神戸から柏原に移り、聖書塾をひらいて自給しつつ伝道および日本人伝道者の養成をされた。この日本人伝道者の一人飯田豊師が成松の伝道所を中心に伝道をされていたが、父はその先生の導きによりキリスト教信仰に入信することとなった。昭和初年頃の丹波地方がどのようなであつたか詳しくは知らないが当然キリスト教といういわば外国の宗教を受け入れ難い風土であつた。そのなかで父の入信についてはそれなりの戦いがあつたと思われる。たとえば谷川氏の父親は氏が若いころ亡くなられたそうであるが、その時キリスト教式の葬式をしたために埋葬の作業をしもらうことができず、氏は父と一緒に土を掘って埋葬したそうである。しかしその頃キリスト教に入信した若い人の数はけっこう多かつたようで、これは大正期という比較的自由な

時代のなごりが昭和初年頃の農村には残っていたことと関係があると思われる。父の場合は母子家庭の末子であるから古い因習の束縛からの解放というよりも、彼自身の魂の救いを求めるまじめな心がキリスト教に強くひかれたのではないかと思う。それまでキリスト教とはなんの関係もなかった父が若い時にイエス、キリストの救いをうけ、それを終生全うすることができたことは全く神の恵みであり、父も生前そう言っていた。

その後父はそれまでと変わらず、なまじ伝道者になろうなどという気をおこさず、自分の仕事に精をだしていたようである。また職人としての自分の腕にも自信を持っていたようである。しかし時とともに世は戦時体制になりその影響はいなかにも及んできた。その最もおおきなものは、ブリキ職人にとって大切なトタン板が手に入らなくなったことである。そこで父は残念ながら仕事を変えざるをえなくなり、仕事を求めて京阪神や舞鶴などの工場などを渡り歩く生活が続いたようである。父のアルバムには舞鶴でサルベージ船に乗り、潜水夫をやっている時のものがある。また朝鮮に行ったことがあるとのことを聞いた。しかし時代は戦時体制がますます強化され、なによりも徴兵が身にせまってきたので、それから逃れるために軍需工場に技能者として勤める道を選んだとのことである。そして昭和十四年兵庫県武庫郡鳴尾村（現、西宮市）にあった川西航空機に採用され、サラリーマン（工場労働者）となった。二十九才のことである。仕事の内容は軍の大型飛行艇にとりつけるフロート（浮き）を作ることであった。工場での勤務ぶりは優秀であったら

しく上司から認められて班長なども勤めたそうである。

この間に昭和十年二月八日父は最初の結婚をした。相手は旧姓山田孝子といって同郷（杉原谷）の人でクリスチャンであった。しかし彼女は病弱で結婚後七年で病死された。昭和十七年二月十六日、三十二才であった。当時父は母とみゑと一緒に三人で暮らしていたそうであるが、彼女が病床についてから戦時中の物資の乏しい中で、看病に心をくだしていたことを伯父さんからも聞いた。なお彼女の兄さんは山田周二といわれ、戦後軍隊から復員されて多紀郡山南町に住まわれていたが、仕事が左官屋である関係もあって父が柏原に住んでからも交際があったとのことである。また後日父が藤原家の墓地を杉原谷から柏原へ移したが、彼女の墓をきちんとしたいとの父の意志があったようで、キリスト教式の墓碑の最初に彼女の名前が刻まれている。

五、再婚から終戦までの時期

その後父は再婚したが、その相手が小生の母である。仲人は同じクリスチャンで母とみゑとも親しかった谷川氏である。谷川氏夫妻には子供がなく、丹波柏原教会の鎌野牧師夫妻の三女を養女とされていた関係で鎌野牧師夫人（ミツ）の妹を紹介されたのではないかと思う。そして昭和十七年六月二十日丹波柏原教会にて鎌野牧師の司式により結婚式をおこなった。その時の写真が数少ない写真の一つとして残っている。

母サキは大正三年四月十三日、新潟県南魚沼郡塩沢町字石打にて鈴木惣松、マツの五女

として誕生した。家業は中規模の専業農家であったが、父親は子供が女ばかりであることをひどく悔んでいたそうである。大正年間には新潟県の上越沿いの湯沢温泉あたりにもキリスト教の宣教師が伝道にきており、彼女達も教会学校でキリスト教の話を聞いたそうである。しかしその頃はまだ人信という状態ではなかった。後日彼女の姉ミツが郷里を出て丹波柏原に牧師夫人として住むようになったが、その縁ではるばる単身柏原にやってきた。それが昭和十年、二十一才ころのことであった。ちょうど姉夫婦に四番目の子供が生まれたので手伝いながら一緒に住んでいたが、昭和十三年九月九日に受洗してクリスチャンになった。

母の結婚生活はおなじ鳴屋の社宅ではじめられたが、日米開戦の半年後（昭和十七年）であったので厳しい生活であった。その年の六月二十九日には旧ホーリネス教会系のきよめ教会と聖教会の牧師らが信仰上の理由で検挙されるという事件があり、父や母も信徒の一人として警察に連行され取調べをうけたそうである。そして翌年十八年七月十七日に第一子、献志が誕生した。戦時中の育児のことは省くが、十九年十二月になると本土空襲が激しくなり、とくに社宅は工場のそばにあるので空襲の被害をいちばん受けやすいわけである。それで空襲のたびごとに小生をおぶって近くの武庫川の堤防をよく走ったとのことである。空襲がいよいよ激しくなると母と小生は母の縁で柏原に疎開したが、父はとどまっていたので三月十三日の阪神地区大空襲をはじめとして何度か死の淵にたたされたそうである。そしてとにもかくにも神に守られて終戦を迎えたが、工場も焼失してしまったので

あるから母たちのいる柏原へ帰ってきた。こうして古い日本の消滅とともに我が家は柏原で新しい生活を始めることとなった。

六、柏原町屋敷にいた頃（昭和二十一―三十年）

このようにして父は以後三十五年間柏原を終生の地とすることになった。

最初住んでいた教会の建物はソントン師のはじめられた聖書塾のもので、ちょうど学校の校舎のように中庭をはさんで木造二階建の建物が二棟あった。私達三人の家族は、そこに一間を借りて二、三年ほど住んだ。そしてその建物の南隣に昔ふうの大きな屋敷があり

家主は高岡さんという方であったが、昭和二十三年頃よりそこを父が借りることができた。その敷地の片隅に念願の仕事を新しく建てることのできたことは最初に記した通りである。父がブリキ職人として自立してから二十一年め、三十八才にして始めて自分の仕事場を持ったのであるからどんなにか嬉しかったであろうと思うが、当時五才の子供にとってはそこまで知る由もなかった。しかし子供心にも父が張りきって仕事に精をだしていたのをよく記憶している。以後、昭和三十年まで七年間そこに住んだが、その間二回も仕事場を建かえているので、資金のうえでも大変だったろうと思うが、時は戦後の復興期であったので、仕事もよくあったし父も若かったので仕事に追われる日々であった。昭和二十一年十二月二十一日に妹、絆（ひとみ）が、二十四年十月四日に弟、義和が生まれ、二男一女の父親として充実した日々をおくっていたように思う。小生も幼稚園と小学校

(崇広小学校)の七年間をそこで過ごしたのであり、いろんなことがあったがそれらは次の機会に記すことにする。

七、柏原町下町に移ってからの生活(昭和三十―五十五年)

昭和三十年四月、小生は柏原中学校に進み、弟も同時に小学一年生になった。その頃は戦前の中学校と区別するために新制中学校といふ義務教育であったが、新しい教科もはじまり本人がうれしかったのは当然であるが、父もうれしかったのではないかと思う。

新学期が始まってまもなく五月に、我が家は同じ町内の下町(しもまち)にある古い大きな家に引っ越すことになった。場所は柏原警察署(これは昭和六十年暮れに移転し建物は取り壊された)の道路を隔てた隣の広いやしきであった。それまでの家が借家であったことによって子供である小生が特別不自由をした記憶はなかったが、自営業者である父にとって自分の家を持つということは切実な願望であったのだからと思う。しかしそのためにはいろいろな困難があったようで、小生にとっては突然の引っ越しであったが父母にとっては長い道程の末の結論であつたろうと思う。ともあれ柏原に来て十年、四十五才にして二百坪のやしきを得たことを自分達の勤勉の果実とした以上に神の恵みとして感謝したことはいうまでもない。ちなみに現在も座敷の間の壁に架けてあるミレーの絵「晩鐘」はこの時の記念としていただいたものである。

しかし引っ越しの工事などが一段落した頃から母が病の床に伏すようになった。ある人は

家にあった仏壇ややしきの隅にあったお稲荷さんを取り払ったためだというひともいたが父はそのような言葉にとられることなく治療に努力した。これはある人の勧めにしたがったのだとおもうが、鯉を黒焼きにしたものを食べるとよいというので庭に糞殻を積んで丸焼きをつくった記憶がある。その効果があったのか、母はようやくその年のうちに良くなった。

父は屋敷に居たころに浅葉松二さんというお弟子さんをとっていたが、下町にきてから年季があけたので独立し、かわって上嶋竹夫さんというひとが住込みで弟子いりされた。この六年間は父の四十五才から五十一才までのいわば中年の安定した時であり、小生の高校進学の時にかかるので記憶に残ることが多いが、小生が勉強したいというのを認めて高等学校へゆかしてくれたのは父の理解があったればこそと思う。そして昭和三十七年四月、弟は中学、妹は高校(柏原高校)、小生は大学(静岡大学)にそれぞれ進学した。小生の場合は志望どおりではなかったので必ずしもめでたしというわけではなかったのであるが、父にとっては金のかからない国立に現役で入ってくれたのでまずはよかったという気持ではなかったかと思う。そしてその後小生だけ家族から離れて暮らすことになった。

ところがその年の九月二十一日、父は交通事故にあい、一家四人は最大の危機をむかえた。その日父は杉原谷から仕事を終えてオートバイ(愛用の本田ベンリ1号125CC)で大名草の夜道を走行中後方から来たオート三輪車(山口某運転)が追い越しの際激しく接触し父は跳ね飛ばされ生命はとりとめたものの右肩腕骨折、右大腿部神経切断という重傷

であった。ここで四人と書いたのは小生を除いたという意味であるが、小生には事故後二、三か月後にはじめて知らされたからである。父が言うには、九月は大学前期の期末試験があり入学して初めての試験であるからそれに支障になってはいけなかったので知らせなかったとのことであった。幸い生命はとりとめたとはいえ、また小生が静岡という遠隔地（当時新幹線はまだ開通していなかった）に居たからとはいえ、事故直後に誰も教えてくれなかったということはまことに奇妙というほかない。しかも十一月にそのことを手紙ではじめて聞いた小生も十二月のクリスマスに洗礼を受けるとの理由ですぐには帰郷しなかったが、今考えてみるとこれも奇妙というほかない。こうして長男である小生は父の重大な時に立ち合うことなく、ひととおりの治療などが終わったその年の暮れにひよつこり帰ってくるというまことに間のぬけたことになってしまった。小生は自分の学業生活の継続について当然深刻に考えたと思うが、入学時より奨学金を受けていたのと卒業後大学院へいくことを心に決めていたので、母や妹弟の生活のことを充分考えていなかったのではないかと悔まれる。何回もの手術を受けて父はようやく歩けるようになった。しかし右手はどうしても自由がきかなかつたが、幸いにも父は左利きであったので仕事をはじめようになった。このときも小生は一緒に生活していなかったのがいかに困難であったかよくはわかっていないと思うが親子五人の生活のために父は気力で頑張ったのだらうとおもう。ここで話しは前後するが、事故の前年昭和三十六年春に父は藤原家の墓地を柏原に移した。すなわち杉原谷にあった先祖の石碑を綾部と柏原に移し、柏原の岡場という墓地（自

宅の近くの山裾）に新しいキリスト教式の石碑を建てた。そしてこの新しい石碑には最初に前妻、孝子の名前が刻まれた。このことは父の長年の念願であつたらしく、クリスマスとして天に召された前妻の記念会を墓前でおこなったときいている。この頃このあたりでキリスト教の石碑は初めてでなかったかと思う。

それから約十年たった昭和四十六年十一月十四日に母とみゑの死に遭遇した。綾部の兄の家で老衰のためやすらかな死であつたという。年齢は八十九才であつた。母とみゑは次男喜一が鳴尾に住んでいた一時期を除いて綾部で長男と一緒に暮らしていた。そして時どき柏原へ来て家事などを手伝ってもらっていた。とくに我が家が屋敷町に住んでいた頃が多忙な時期であつたのでよく柏原に来てもらったように思う。したがって小学生の小生はじめ妹弟はたいへんお世話になった。また父も母とみゑにたいして大変やさしかったようにおもう。母とみゑが死去したとき父は六十一才であつた。

父の交通事故から母とみゑの死までが父の五十代の時であり家庭的にはいろんなことがあつたが、とくに長男が家を離れ家業を継ぐ意志がなので、また父自身もそのことを承知していたのであるが、やはり一抹の寂しさがあつたのではないかと思う。そしてなにより世間的な老後の生活にたいする安定感が持ちにくかつたのでそれだけにひたすら働くという生活を続けたのではないかと思う。しかし昭和四十四年四月二十九日に長女が近く（氷上

町)に嫁いだので、その結婚に父自身も喜び、自分達の老後の期待を娘にかけていたように思う。ところが昭和四十七年に長男がようやく就職し、三年後に関西で結婚したので、父にとっては事情がだいぶ変わってしまったのではないかと思う。しかしそれはそれとして息子がおちついてくれたことを親として喜んでいただように思う。そして六十代は普通の人以上に体力の衰えが加わってくるので以前よりはゆったりした気持ちで仕事をしていたように思う。しかしその半面心を煩わされることが多かったようで、特に五十二年には丹波柏原教会の会堂改築にあたりその役(建築委員長)を引き受けたことが大きな出来事であった。いまからおもうとこのしごとでかなり心を痛めることがおおかったのではないかとおもうが、とにかく一生に一度のことであるから全力を尽して事にあたったようである

そして夏に新会堂は完成したが、五十四年八月聖日礼拝司会中に気分が悪くなり柏原病院に入院した。この時も小生は柏原にいなかったで後日病院に見舞ったとき父の病がそんなにも重いとは夢にも思わなかった。年末に病院の医者から妹と一緒に呼ばれてレントゲン写真を見せながら胃癌だと言われたときも、正直に言って半信半疑の状態だった。しかし年が明けて入院退院を繰り返すうちに父の体は急激に痩せ細ってきた。それで小生も癌というのはやはり本当かと思うようになったが何をすることも出来ないまま四月に柏原に帰った時に自宅に帰っていた父と話したのが最期になってしまった。

六月五日夕方から父の容態が悪化したとの電話を受けたが、その日はたまたま勤務後に図書館へ行っていたので枚方の自宅から福知山行最終列車に間に合わなかった。六日未明に

父が天に召された時、側にいたのは母と妹だけであった。父は庭の花を見ながら母の手を取って母だけが側にいてくれたらそれでいいのだと言ったそうである。

なお弟、義和は父の倒れる直前七月二十三日、京都大学より理学博士号(物理学)を授与され、翌年四月三日病床にある父に別れを告げてカナダの大学へ更に勉学のため単身旅立った。

八、あとがき

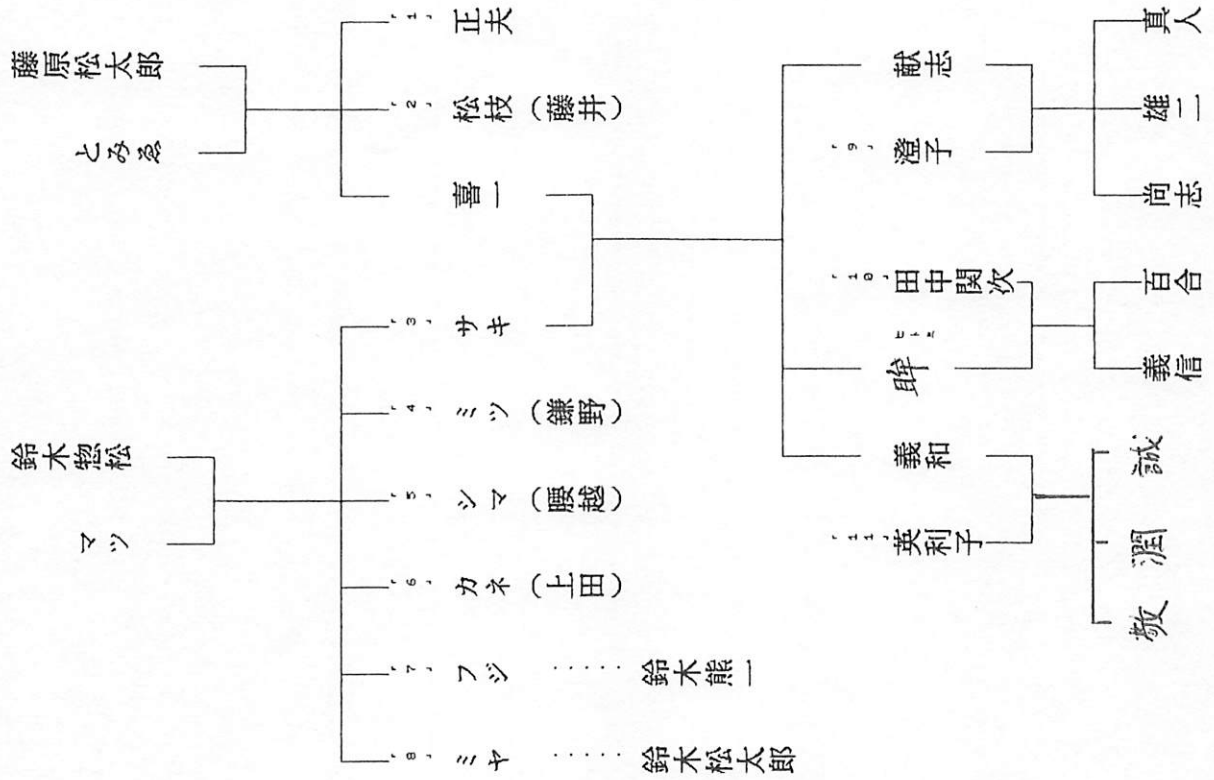
その後、弟は三年後の昭和五十八年夏に結婚のため一時帰国して父の墓前に報告したが、現在アメリカに在住している。

父の一生はまことにささやかなものであったが、十八才でクリスチャンになって以来五十二年間非キリスト教社会の農村で唯神の栄光の為との信仰を持って己が職業に忠実に歩んでいった。この父を天上のイエスキリストはどのように迎えてくださったであろうか。父の建てた墓碑のうえには聖書の言葉として「我らの国籍は天にあり」「我はよみがえりなり命なり」と記されている。

昭和六十一年一月記す

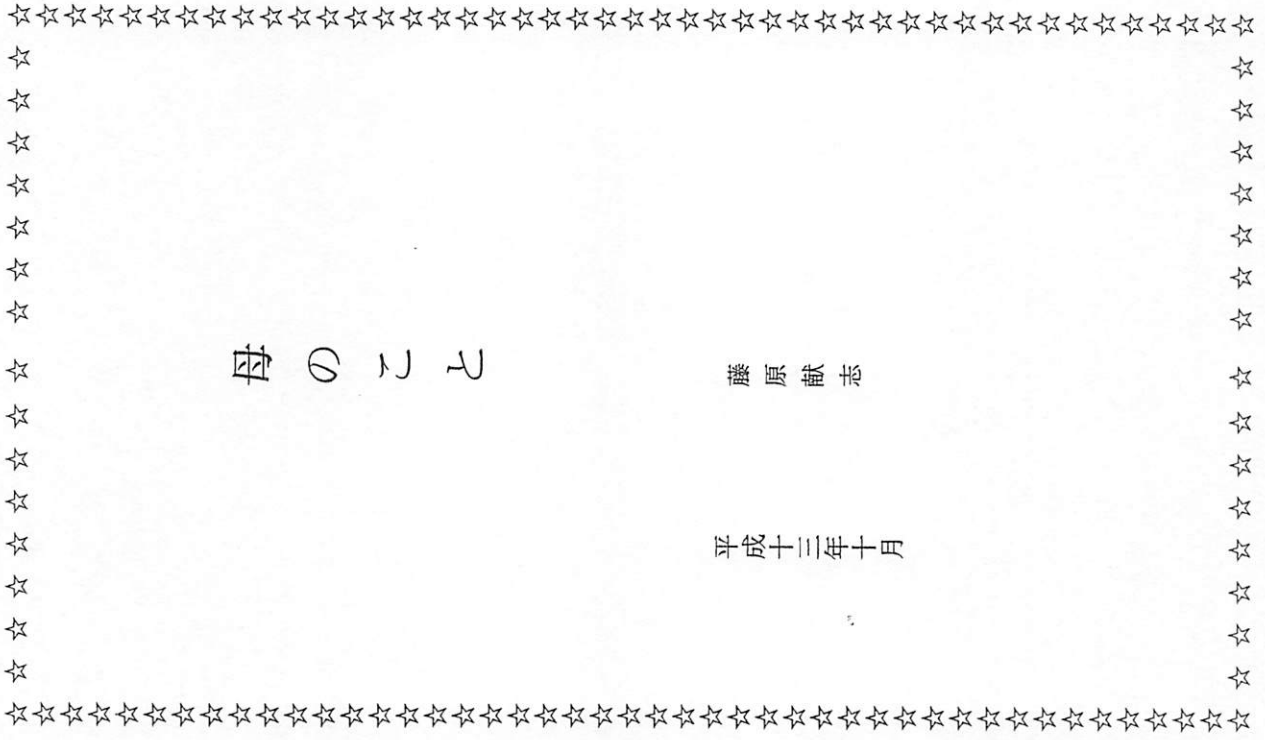
父の血縁

昭和六十一年一月現在



続柄および現住所 等

- 「1」 京都府綾部市本町一丁目
- 「2」 大阪市大淀区长柄中二丁目六番三十一号
- 「3」 五女、兵庫県氷上郡柏原町柏原三百十番地
- 「4」 三女、故人、昭和五十八年十二月六日
夫良作の現住所、兵庫県氷上郡柏原町屋敷四百三十八番一号
- 「5」 六女、埼玉県浦和市南浦和二丁目十九番地十二号
- 「6」 次女、岐阜県大垣市室村町二千百八十三
- 「7」 四女、故人、長男熊一の現住所、新潟県南魚沼郡塩沢町大字関
- 「8」 長女、故人、長男松太郎の現住所、同右
- 「9」 兵庫県氷上郡氷上町成松、八尾精一、ふさの、長女
兵庫県宝塚市山本南三丁目十二番一の三百十一号
- 「10」 兵庫県氷上郡氷上町氷上、田中謙蔵、まさる、次男
氷上町氷上三百九十四
- 「11」 東京都世田谷区駒沢、上原茂胤、伸子、三女
1835 Shirley Lane, Bldg 6# A5 Ann Arbor, Michigan 48105 USA



母のこと

藤原献志

平成十三年十月



昭和六十二年一月十七日 七十二才

一、はじめに

母が天に召されて一年以上経過した。父が召されてから二十一年である。以前「父のこと」を記したので、その後母が亡くなるまでの事柄を記して、母の記憶を留めておきたいと思います。八十五年の母の生涯といっても格別なものではなく、我々子供三人の思いでにすぎないけれど、聖書の信仰者たちが行ったように、神様から受けた数々の恵みを「子の子ら」に語り伝えることは私たちの務めと思います。

二、生まれてから郷里を離れるまで

母サキは大正三年四月十三日に新潟県南魚沼郡石打村大字関九五五番地にて、父鈴木惣松(そうまつ)、母マツの女ばかり六人姉妹の第五女として誕生した。

その年は西暦でいえば一九一四年で、大西洋で客船タイタニック号の遭難があつた二年後、第一次世界大戦がヨーロッパで始まつた年であり、激動の二十世紀初頭である。しかし、この世界的規模の出来事も欧州が中心ということもあり、日本の片田舎にその影響はほとんどなかつたと思われるが、明治や昭和時代と異なり、比較的自由に開放的な時代であつたと言われている。学校の教科書にカタカナ文字が採用されて、人名にもカタカナが多かつたのはそのためである。その片田舎に東京上野駅から行くには、上越線で清水トンネルを越え、川端康成の小説「雪国」で有名な越後湯沢温泉にたどり着き、そのさらに一つ向こうの田園の村である。海沿いにある大都會、新潟からもはるか遠く、群馬県との県境の村である。当時の上越線を走る列車はもちろん蒸気機関車であり、清水トンネルは日本

列島の背骨である谷川岳を貫く難所であつたので、トンネルの通過には二重連結の蒸気機関車が牽引したということである。小生が小学五、六年生であつたと思うが、その頃学校で学んだ「雪国の生活」について興味をもち、母から聞いたことをノートに書いてまとめたことを思い出す。その方面の名著として、江戸時代後期に越後塩沢出身の作家、鈴木牧之(スズキホクシ)が書いた「北越雪譜」があることを小生が知つたのはずっと後のことである。

六人姉妹は次のとおりである。

長女 ミヤ サキが幼少の頃、亡くなった。

次女 フジ そのため、次女が長女の務めを行つていたが、第二次大戦後まもなく亡くなった。

三女 カネ 嫁いで上田姓。岐阜県大垣市に在住。平成十三年四月八日逝去

四女 ミツ 嫁いで鎌野姓。兵庫県柏原町に在住。この姉がサキと最も深い関係になる。

昭和五十八年二月六日召天

五女 サキ 本人。嫁いで藤原姓。兵庫県柏原町に在住。平成十二年四月十二日召天

六女 シマ 嫁いで腰越姓。埼玉県浦和市(現さいたま市)に健在

家業は農業で、当時は中規模の小作であつた。父親は子供が女ばかりであることを嘆き、いつも酒を飲んでいと聞いている。サキは子供心にそれが一番いやなことであつた語つている。家はキリスト教とは何の関係もなかつたと思うが、当時湯沢や石打のあたりにキリスト教の宣教師が布教活動をしており、家で子供のための教会学校が開かれていたらしく、宣教師の写つた写真をサキは持っている。大正十二年(一九二三年)九月一日の関東大震災の時、九才であつたので、そのニュースを聞いたのを

覚えているとのことである。昭和二年に十二才で石打尋常小学校を卒業。その後、地主である東京の樋口家へ見習い奉公として働いたり、郷里へ帰ったりしていたようである。樋口家での生活について、サキは多くを語っていないが、比較的多くの写真が残っているので推察すると、樋口家も女の子ばかり六人の誕生が続き、ようやく男の子が誕生したので、その世話をしていたようである。その子が四、五才になるまでの四、五年間、東京のお屋敷に住んで、いろんなたしなみを付けさせてもらったと考えられる。写真でみる限り和服の着こなしもそんなに野暮ではないし、後年結婚してからの家庭料理は結構上手であつたし、手回しのミシンも使いこなして、洋服の縫い物などもこまめに行っていた。ただし、手紙の文字はひどいもので、それは一生治らなかつたが。柏原に来る前のサキは、もはや単なる田舎娘ではなかつたように思う。

一方、三女カネと四女ミツは岐阜県大垣市の紡績工場で女工として働いていたが、ミツはキリスト教の集会に出席していたらしく、昭和五年に美濃ミッションという宣教団の宣教師と一緒に兵庫県柏原町にあつたキリスト教会にきて、そこに居た鎌野良作氏と結婚した。柏原町のキリスト教会には大正九年にアメリカ合衆国からきた宣教師ソートン師が開いた日本人伝道者養成のための聖書塾（神学校）があつた。ソートン師は六年間の宣教活動を終え、大正十五年四月にアメリカに帰国したが、その直後、鎌野氏はその教えを慕つて静岡県から柏原に来られた。当時その教会には数人の日本人伝道者が居られた。昭和十年頃、鎌野家に次男が誕生したが、すでに五人の子供がいたのと、姉は病弱であつたので、妹サキが新潟から呼ばれたとのことである。それは昭和十年、サキが二十才の頃であつた。

三、柏原へ移つて終戦まで

いくら呼ばれたとはいえ、当時新潟県から兵庫県までは鉄道でかなりの長旅であつたし、見も知らぬ土地に行く決心が良く出来たものと思われるが、母が言うには、雪深い地方での生活がイヤだつたと酒飲みの父親のもとを離れたかつたからとのことである。そして当時柏原教会の有力な信者であつた山脇末鍋さんのご家族にお世話になつた。その方は柏原女学校校長の奥様で、柏原町屋敷にかなり大きなお屋敷の家があつた。いち時期、柏原教会の初代牧師でその後大阪府池田市にある教会を牧会されていた岸本牧師のところでお世話になり、昭和十三年（一九三八年）九月九日、岸本牧師から洗礼を受け、二十五才でクリスチャンになつた。そして翌年、昭和十四年に鎌野良作氏は柏原教会の牧師に任命された。しかし日本は、昭和十二年に満州事変がおこり、中国と全面戦争に突入していたので、キリスト教伝道は極めて難しい時代になつていた。そして、昭和十六年十二月八日には日米開戦となり、その困難は決定的となつた。

翌年、サキに大きな転機が訪れる。昭和十七年六月二十日に同じ柏原教会のクリスチャンである藤原喜一と結婚する。サキ二十八才、喜一は三十二才であつた。我々の父、喜一は兵庫県多可郡杉原谷村（現加美町）大袋の出身であるが、当時、川西海軍工廠に職工として勤めていた。同郷のクリスチャンである妻「こう」（旧姓山田孝子）と母「とみゑ」と共に武庫川の河口、阪神電車の近くにある社宅（武庫郡鳴尾村上田十八、現在の西宮市）に住んでいたが、昭和十七年二月十六日、「こう」は病死した。それで、喜一の友人である谷川良夫氏を媒酌人として結婚することになった。恋愛結婚でもないし、

前妻「こう」には生前病弱で子はなかったのに、四ヶ月後の再婚は早すぎるように思われるが、いろいろ事情があったようである。谷川氏は喜一と深い関係のあった人であるが、氏は鎌野牧師すなわちミツの子供を自分の養女として養育されていた。昭和十年から丹波新聞社の記者として教会のために尽くされたが、時局のため丹波新聞が昭和十六年に休刊になったので、大阪の毎日新聞に移られていた。二人が結婚してまもなく、六月二十九日に宗教上の事件に巻き込まれた事は、すでに「父のこと」で書いたとおりである。戦時中のゆえ、新居といっても西宮の同じ社宅で生活を始めた。昭和十八年七月十七日、長男献志が誕生した。サキ三十歳の初産である。当時、喜一の母は京都府北部にある綾部の兄（正夫）の家に居たと思われる。戦争はいよいよ激しくなり、京阪神地域の空襲が頻発した。その度に、サキは小生を背負って武庫川の土手を走って逃げた。特に、三月十四日の阪神大空襲はすさまじく、焼夷弾の降る中、両親は命からがら逃げたとのことである。それで、母だけが小生（一才八ヶ月）を連れて、姉ミツを頼って、柏原に疎開をした。父は終戦の八月十五日まで西宮の工場にとどまっていた。終戦になって、父は縄をタイヤがわりに巻いた自転車で、西宮から逆瀬川を上って宝塚へ、そこから三田をとおって柏原に居る妻子の所へ帰って行った。この終戦の混乱において我ら三人の命が守られたことに、両親は神様に深い感謝をささげた。こうして我が家の戦後は柏原で始まった。

四、戦後の柏原での生活

この後のことは「父のこと」で書いたので省略し、父、喜一の死後のところから話を始めるが、我が

家の戦後の生活がなぜそのまま柏原で始まったかについて書いておきたい。

サキは結婚し自分の所帯を持ったのであるから、いまさら新潟へ帰ることは考えても見なかつただろう。かといって、柏原に自分の家があるわけではないし、姉のそばといっても経済的に頼れるわけでもなかつたが、とりあえず雨露をしのぐところがあったのと、信仰的な安心があつたので柏原に住む以外のことは考えられなかつたであろう。しかし、父の考えは少し違つていたようだ。杉原には古い家屋とはいえ自分の親の家があるのだから、杉原に帰ることも考えたはずである。

父は仕事としては、元々ブリキ職人であつたから、勤めていた工場がなくなつた以上、もとの仕事を始めるつもりであつた。しかし、終戦後も、材料のブリキ（トタン板）は全く手に入らなかつたので、鑄掛仕事つまり鍋や釜の修理などの仕事しかなかったが、平和な時代になって、金属製品の需要は次第に多くなつたし、自分の手に技術があつたので、仕事に不自由することはなかつた。トタン板の工場生産が始まって入手できるようになり、米の増産が進むのに応じて、米貯蔵器を作る仕事が増えてきた。柏原周辺のみならず、遠く杉原の知合いの農家からの求めに応じて、米四石入りの大きな円筒形の缶を作つては、当時出まわつたばかりの原動機付自転車に積んで、度々杉原へ行った。店はなにも柏原でなくても杉原にあつてもよかつたわけである。しかし、結局我が家は杉原に帰らなかつた。その理由はいろいろあつたようであるが、父が言うには、「子供の教育の為には、杉原よりも柏原が良い」との考えであつた。柏原には旧制柏原中学校と相原女学校があり、戦後まもなく新制柏原高等学校になつたので、自分達の行けなかつた高等教育を子供達には受けさせてやりたいとの考えであつた。母は教会へ行くことは勿論、小学生の小生に家事や家業もよく手伝させたが、珠算や書道の塾に

通わせたり結構教育ママ、パパであつたと思う。しかし勉強することを親が強いることは全くなかった。一貫して、子供が勉強するのならさせてやるという方針であつた。話が横道にそれるが、後年父が交通事故で身体障害者になつてからも生活の為に働いているのに、長男である小生が大学を卒業しても直ぐ就職せず、六年間も大学院にとどまるという無茶なことを行つてしまった理由には、小生にそういう意識の甘えがあつたのだらうと思う。それはそれとして、終戦後五十五年たつた今では、道路状況など日本の交通事情はすっかり変わつてしまつたが、戦後のその時代には父の判断は正しかつたと思う。父は母に引きずられて、柏原に住むことになつた、この見方も出来ないわけではないが、父は自分の決意によつて故郷を出て、柏原に住むことを決めたのだと思う。そのことを、父は聖書（創世記十二章）に記されているように、カナンを目指してユフラテ川上流にある郷里ハランを出た信仰の人アブラハムの生涯に自分の思いをなぞらえている。

ここにもう一つのことを記さなければならない。昭和二十九年一月三十日にサキの父惣松が死去した。八十三才であつた。実はそれ以前に、終戦直後の昭和二十年十一月二十三日に、それまで郷里で長女の役目をはたしていた次女フジが、翌年五月三十日には母マツが相次いで死去した。この時のことに小生は当然何の記憶もないが、サキはおそらく交通事情の関係で、葬儀に行かなかつたと思う。それで、サキは自分の主人喜一を生前の両親に会わせることができなかつたわけである。今回、サキは姉ミツと共に、喜一とその子義和（五才）を同行して父の葬儀に出かけた。良作氏とその他の子供達は学校や仕事の都合で同行しなかつたが、大旅行であつたと思われる。この帰郷は二人の姉妹にとって、戦争という激動の時代を挟んで約二十年ぶりの帰郷であつた。父の葬儀は仏式で行われたが、クリス

チャンになつた二人の姉妹はそれなりの伝道を行つたことであらう。

その後再び故郷を訪れたのは、新潟県出身の田中角栄氏が総理大臣になつた昭和四十八年頃の夏であつたと思う。その時は、東京で就職し社会人となつたばかりの小生（三十才）が同行した。上越新幹線の開通は昭和五十七年（一九八二年）十一月であるから、その時はまだ開通していなかつたが、在来線の鉄道は電化され、東京からの交通は極めて便利になつていた。それ以降、両親は度々郷里を訪問するようになった。

五、喜一の死後、柏原での一人暮らし

父の死は、病が急激に進行したので、母にとつても非常なショックであつたことは言うまでもない。本人の記した看病記は別紙の通りである。我々も母の健康を心配し、母がそのまま一人で生活することに不安を感じたが、まもなく母も元気になつたので、本人の意思でそのまま柏原に住むことになつた。当時、弟義和はカナダに留学中であつたが、小生の家族は大阪枚方市の公園団地に、妹眸一家は隣町の氷上町に住んでいたので、何の問題もなかつた。

ところが、昭和五十八年二月六日姉ミツが病で天に召された。鎌野牧師は既に引退して柏原教会の名誉牧師となつていたが、姉ミツの死はサキにとつてショックな出来事であつたでしょう。

その後義和は日本でクリスチャンの結婚相手が与えられ、そのために昭和五十八年八月一時帰国して東京の教会で結婚式をあげ、奥さん（旧姓上原英利子さん）と共にカナダへ歸つて行つた。そのこともあつて母の気分も晴れたのであらう。またそれまでは、夫婦で生活しているとどうしても男の考え

に縛られて自分の自由が束縛されていたであろうが、この頃は自由に伸び伸びと生活していたようである。町内の人々と、老人会の旅行だとか、老人大学とかゲートボールの試合だとか、今までの母からは考えられないような生活であった。また教会の奉仕も今まで以上に励んでいたようである。さて、義和一家は昭和六十二年春にドイツに移り、そこで子供が誕生したので、それを機会に母はドイツ旅行をすることになった。海外旅行は勿論初めてである。義和は日本に出張した機会に旅行の段取りをして、母と一緒にドイツへ帰っていった。我々は大変心配したが、二三ヶ月後本人は平気で一人で帰ってきた。本人が楽しかったかどうか知らないが、昔若い頃、新潟から柏原まで（おそらく）一人で来た時と同じような気分であったのかなと小生は思った。その後まもなく、小生は昭和六十二年四月から東京の研究所（科学警察研究所）へ転勤となったので、翌年四月から家族も長年住みなれた関西を離れて、東京の西武池袋線沿線所沢の手前の東久留米市にある公務員住宅に住み始めた。母を残して東京に住むことに気がかりはあったが、妹が傍に居ることで心残りはなかった。また、小生が東京に転勤した直ぐ後九月に、義和は京都大学の教官（助手）に職を得て、一家四人は帰国して京都に住むことになった。従って、それ以後小生が母の生活ぶりについて知ることは以前よりは少なくなった。この頃には、母は相原町下町の藤原家の所帯主としてやってきたので、特に心配することは何もなかった。昭和六十四年（西暦一九八九年）一月に昭和天皇が崩御された。大正から昭和に変わった時、サキは十一才であったが、その時代が終わり平成の時代が始まった時、サキは七十四才であった。それからまもなくして、平成元年二月二十五日、鎌野良作牧師は天に召された。八十八才であった。なおこの年の十二月にはベルリンの壁が崩壊して、統一されたドイツ共和国が誕生した。これは戦後の

東西冷戦時代の終了を意味する出来事であった。

平成五年の夏に母の望みで、喜一の十三年記念会を初めてすることになった。大阪のおばちゃん（おばちゃんは昭和六十一年七月に逝去された。）の子供達、綾部のおじちゃん（おじちゃんはこの頃体調が悪く伏しておられた。）の子供達と、京都に住んでいた義和一家、東京から小生一家、そして陣一家、総勢二十人近くが水上町の保養施設「やすら樹」に集まった。サキにとって念願の嬉しい時であった。しかしそれがサキにとって最後のハレの時であった。翌平成六年一月二十五日、突然母が脳溢血で倒れたとの知らせを妹から受けた。

六、闘病生活と死去

その日たまたま母を訪ねてくださった近所の香川さんが家の中で倒れている母を見つけて、県立相原病院に運び込んでくださった。小生も妹も後で駆けつけたことであった。いつも居るテレビとやぐらコタツのある部屋で、その間に倒れていた。丁度風呂上りの後のような着物姿であったという。発見された時はほとんど死んだように冷たくなっていたとのことで、懸命に救護処置をしてくださった医者のおかげでようやく命を取り留めることができたが、倒れてから発見されるまで三日経過していたとのことである。つまり一月二十三日の夕方脳溢血で急に倒れ、二晩真冬の夜中を浴衣姿で過ごしたということである。丁度八十才になる年の始めであった。それらを思えば命の助かったのは奇跡的としか言いようがなく、命が助けられたことを香川さんや病院の方々に感謝したが、小生の思うにはそれまでゲートボールの運動などで体を鍛えていたおかげで体は若々しかったのだと思う。しかし血管

の老化は別のことであり、前年の秋に受けた町の健康診断票には高血圧についての注意が記載されているのを小生が見たのは後日のことであつた。その後の治療やりハジリによつて著しい回復を示し、意識はつきりとし、体もある程度動かせるようになった。しかし、右半分的神経は全く不能となり、右腕および右足の自由が全くきかなくなつた。また、舌が不自由のため、発言は全く不可能で、相手の言葉は理解できるものの、自分の意思を伝えられない状態になつた。意識はつきりしているため、一時は絶望的な気持ちになり、食事を拒否することもあつた。そのような状態を見ると、命が助けられて確かに感謝したものの、命があることは本人にとって幸せであつたのか、あの時そのまま息絶えたほうが幸せであつたのではないかと、いろいろと考え込んでしまうことであつた。しかし、その後本人の気持ちは落ち着いてきた。ところがその一方で、病院の規則により、その年の八月頃までに退院しなければならなくなり、三人で頭を悩ますことになつた。出来ることなら柏原の家に連れて帰つて、そこで世話をしやりたい、本人もそれを望んでいるに違いないと思つたが、誰も自分の生活を変更して一緒に住むことは不可能であつた。それなら東京に母を連れてきて小生と一緒に住むことも考えたが、団地の借家住まいの身では、それ以上に不可能であつた。それで、当時介護の問題が次第に社会問題として取り上げられていたが、福祉施設でお世話になるしか方法はないとの結論になつた。自分が住んでいる東京の近隣でも施設を探したが、その時はなぜか見つける事は出来なかつた。そして、同年九月に、柏原町の社会福祉協議会のお世話で、山南町野坂に新しく出来た特別養護老人ホーム「山路園」に入れて頂くことができた。ここは以前から社会事業に取り組んでおられる大阪のクリスチャン沢村理事長が設立された施設で、開設したばかりであつたので設備も最新のものであり、

園内では毎聖日職員を中心として礼拝がもたれるなどキリスト教式であつた。その後、母は健康も保たれ、車椅子で平穏な生活を保たれていたが、その精神状態は必ずしもすこやかではなかつた。翌平成七年（一九九五年）一月十七日の早朝、神戸を中心にした阪神大震災が発生した。丹波地方に被害はなかつたが、阪神地区では約五千人の人が死亡した。その後も穏やかに生活させてもらつていたが、老人のことゆえあちこちと体調の不調を生じていた。平成十二年一月末から体調不調により柏原病院に入院していたが、このたびは食物がのどをとおらないとか点滴ができないなど、体力が落ちる一方であり、我々も覚悟をせねばならなかつた。せめて意識のあるうちに柏原の家に連れてかえりたいと思つたがそれも適わず、四月十二日午後一時五十三分に殊が訪れた時には息が絶えていたという。八十六才の誕生日の前日であつた。最後の時に子供三人の誰も看取ることなく召されてしまった。しかしその二ヶ月前ほどは、母も我々も十分に覚悟の時であつたので、母も許してくれることと思つた。翌十三日、これまで六年余りお世話になつた山路園のホールで葬儀を行わせていただいた。新潟の郷里の親戚には直ぐには知らせしなかつたので参列者はなかつたが、谷川さんや鎌野さん一族はじめ教会関係の方々、氷上郡内の多数の知人の方々が参列してくださり、丹波柏原教会奥澤牧師の司式で、良い式を行うことができた。また、五月連休の時に牧師さんと親戚の方々に集まつていただき、喜一と同じ柏原町岡場の墓地に埋葬した。

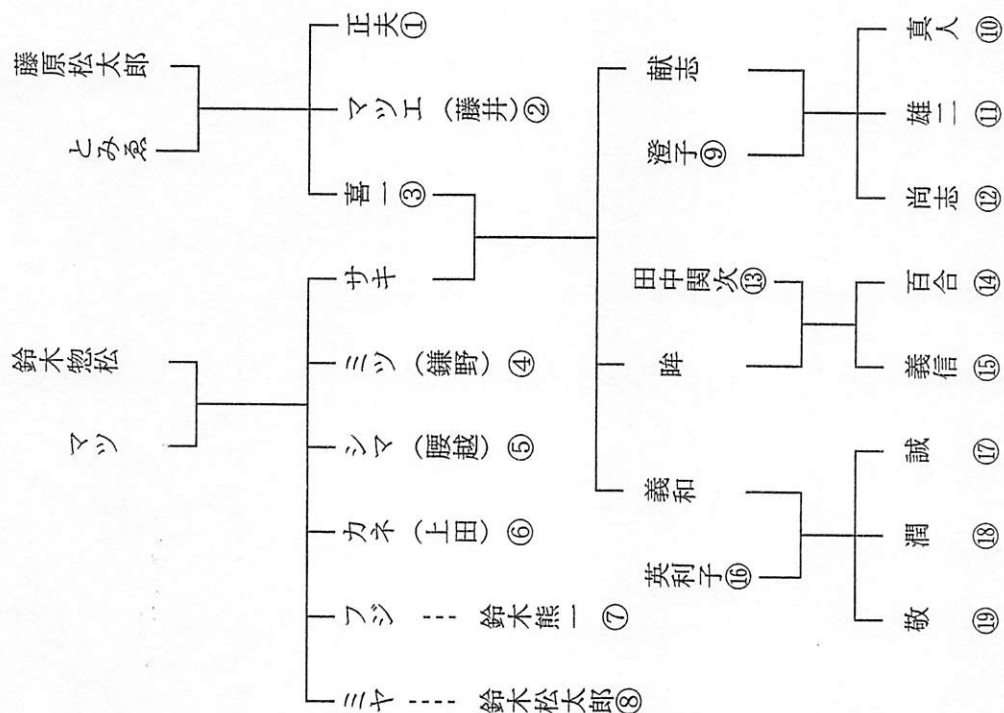
七、終わりに

八十五年の生涯ではじめの八十年は、決して平坦ではなかつたが祝福された生涯という事ができよう。

しかし、後の約六年は本当に忍耐の時であった。自分でその時を短くしようと思っても適わなかった。神様はその時を定めて、人に道を歩ませられる。山路園での礼拝も最初は出ていたが、終わりの頃はそれも苦痛のようであった。しかし、絶えざる主の導きを信じていたので、苦悩はなかったと思う。丁度二十年前に夫喜一を天に送った時のことを思い起こしていたであらう。そして自分の生涯を十分に果たしたとの思いを持って天父のもとに居る我らの父喜一のところへ行つたであらうと信じている。ここに深い感謝をもって筆を置きたいと思う。

私たちは御旨（みむね）の欲するままにすべてのことをなさる方の目的の下（もと）に、キリストにあつてあらかじめ定められ、神の民として選ばれたのである。それは早くからキリストに望みをおいている私達が神の栄光をほめたたえる者となるためである。

エペソ書一章十一、十二節



平成十三年十月現在

- ① 京都府綾部市本町一丁目三十五番 藤原直枝
- ② 大阪市大淀区长柄中二丁目六番三十一号 藤井一雄
- ③ 兵庫県水上郡柏原町柏原三百十番地
- ④ 兵庫県水上郡柏原町屋敷四百三十八番一号 中村良子
- ⑤ 埼玉県さいたま市南浦和二丁目十九番十二号
- ⑥ 岐阜県大垣市室村町二一八三
- ⑦ 新潟県南魚沼郡塩沢町大字関
- ⑧ 新潟県南魚沼郡塩沢町大字関

- ⑨ 東京都東村山市青葉町二丁目三十五番地青葉町住宅十一一三〇二
八尾精一・ふさの長女
 - ⑩ 昭和五十一年五月二日生
 - ⑪ 昭和五十二年十二月二十七日生
 - ⑫ 昭和五十六年十月十九日生
- ⑬ 兵庫県水上郡水上町水上三百九十四番地
田中謙蔵・まさゑ二男
 - ⑭ 昭和四十五年九月二日生
 - ⑮ 昭和四十八年七月二十七日生
- ⑯ 京都市上京区五辻通 大宮東入 東石屋町 七五五十八
上原茂胤・伸子三女
 - ⑰ 昭和六十二年一月十九日生
 - ⑱ 昭和六十二年一月十九日生
 - ⑲ 平成二年三月十七日生